

すゝし



2011 年 クリスマス号 第 185 号

聖 句

わたしが与える水を飲む者は決して渴かない。
わたしが与える水はその人の内で泉となり、
永遠の命に至る水がわき出る。

ヨハネによる福音書 4 章 14 節



[目次](#)

《思いを馳せる》

赤波江 豊 神父

クリスマスおめでとうございます。この時期教会でも社会でも様々な行事、飾り付けで賑わっています。やはりクリスマスはいいものですね。でも救い主の降誕について福音書に記されていることはごくわずかなのです。クリスマスに関する多くの事柄は後の時代に教会が降誕について思いを馳せてつくられてきたことなのです。例えば 24 日の夜には救い主が夜誕生したことを記念してミサをささげますが、福音書には救い主が夜生まれたとは書いてありません。ただ夜通し羊の群れの番をしていた羊飼いのもとへ天使が救い主の誕生を告げた（ルカ 2：8～11）と書いてあるだけなのです。そこからきっと救い主は夜のしじまの中で生まれたのだらうと思いを馳せたのです。また馬小屋で生まれたとも福音書には書いてありません。ただ生まれた後飼い葉桶に寝かされた（ルカ 2：7）と書いてあるだけなのです。普通飼い葉桶は人間が住む家ではなく馬などの家畜がいる小屋にあります。そこから救い主はきっと馬小屋で生まれたのだらうと思いを馳せてきたのです。さらに救い主を礼拝に来た東の国の博士たちが 3 人いたとも書いてありません。ただ博士たちは贈り物として黄金、乳香、没薬をささげた（マタイ 2：11）と書いてあるだけです。そこから博士たちはきっと一人づつ贈り物をささげたのだらう。だから博士たちは 3 人いたのだらうとこれも思いを馳せたのです。

この時期各教会には馬小屋が飾られ、子どもたちだけではなく、普段は人形など関心のない大人の方も嬉しそうに見つめています。皆さんどんな思いで馬小屋を見つめておられるのでしょうか。きっと皆さんの子ども時代を思い出しておられるのでしょうか。自分たちにも子どものときがあったなあ・・・と。クリスマスは私たちを真に産んでくださった神に、私たちの魂のふるさとである父なる神の永遠の国に立ち返るよう呼びかけられるときです。おさな子に帰って素直な心で馬小屋を見つめましょう。



[目次](#)

《 目 次 》

☆ 聖句	．．．．．	2
☆ 巻頭言	赤波江 豊神父	．．．．． 3
☆ 目次	．．．．．	4
☆ 池長大司教司牧訪問	．．．．．	5
☆ 待降節黙想会	昌川 信雄神父（クラレチアン会）	．．．．． 7
☆ 恵老の日	AM	．．．．． 9
☆ セニョール・デ・ロス・ミラグロス	．．．．．	11
☆ バザー	KK	．．．．． 12
☆ 中高生網野キャンプ	．．．．．	14
☆ 七五三	．．．．．	17
☆ 祈念祭	．．．．．	19
☆ バイブルハウス北海道巡礼旅行	RK	．．．．． 20
☆ 信仰の確信	SL	．．．．． 23
☆ 図書を紹介	AS, HK	．．．．． 25
☆ 信徒動静・教会日誌	．．．．．	27
☆ 後記	．．．．．	28

題 字 : 山際 純子

表 紙 絵 : 教会学校

《 池長大司教の司牧訪問 》

1 1 月 2 7 日（日）大司教をお迎えして待降節第一主日のミサに与りました。
大司教はこの聖堂の献堂式以来 6 年ぶりのご訪問でした。
ミサのお説教で待降節を迎える心構えをこの日の聖書からお話し下さいました。

待降節第一主日を迎えて私達は降誕祭に向かって心を準備するわけですが
第二朗読（I コリント 1・3－9）では「神は真実な方です。この神によって、あなたがたは神の子、私達の主イエス・キリストとの交わりに招き入れられたのです。」と、キリストを迎える準備をする言葉があります。でもその前に私達の心をキリストではなくて、まず神に向けさせるという記述から始まります。
入祭唱（詩篇 25・1－3）、第一朗読（イザヤ 63）では「心をこめて神を仰ぎ、私達が神に立ち帰るのではなくて、神が立ち帰って下さい。それも天を裂いて降って下さい」、という強い祈りを聞きます。これは私達が神から離れたところで罪を犯して生きているという事を我々に自覚させます。

◎神様を近くにおいて生きているか？

心を神様のそばにおいているか？ という自覚を持っているか？
そうでなければ神に近づく、神からも近づいて下さい・・・と願うのです。
神様が共にいらっしゃることにうとくなっています・・・目覚めなければキリストを迎える準備ははじまらない。（この日の福音マルコ 13・33－37）
神から存在を与えられ生かされている私達が今日の呼びかけに生き生きと答えられるように、祈ることから待降節を始めましょう。

神様、私達と共にとどまって下さい・・・と願っている私たち人間は神に背きながら常日頃たくさんの罪を犯しながら生きています。そういう自分が無限に正しい神に呼び掛けることが出来るのでしょうか？ 出来るのです。
それは神は無限に私達を愛して下さい、見捨てられないことがない。
救い主キリストを送って下さった父なる神です。だから大いなる希望と確信を持って神に呼び掛けているのが第一朗読。こうして神を感じる事が出来るのです。

◎一人で祈る大切さ

一人で人々からも仕事からも離れた時間を作って神に叫び声をあげて神が来て下さることを信じきって祈ること。神がここにいらっしゃるということは目に見えるかたちはないけれど信仰の中でわからせて下さり、変化を与えて下さるものです。そうすると神と自分の違いが良くわかり、今の自分がどんなに汚れているか、陥りやすい罪がなにかわかってくるものです。
神の前でふさわしくない自分の罪深さが痛いほどわかる…これは完全な痛悔。神にまごころからお詫びの祈りの声をあげると神は愛でしかないから許しをわからせて下

さいます。
こういう祈りが出来るとよいですね。
神様に遠慮しないで近づいて下さい・・・と結ばれました。

(要約 編集部)



[目次](#)

待降節黙想会

平成 23 年 12 月 8 日

指導司祭 昌川信雄神父様（クラレチアン会）

《ミサのお説教から》

待降節こそマリア様に捧げられる「愛と喜びに包まれた待望のとき」。イエスの誕生を待ち望むマリア様にならって過したい。

今日の福音（マルコ 1：1～8）にもあるとおり、洗礼者ヨハネは水で洗礼を授けるが、イエスは聖霊で洗礼を授ける。その洗礼を受けた私たちは過去の価値観を引きずる生活から全く違う新しい人間に生まれ変わったはずなのに、そうでない場合が多い。

アウグスチヌスを回心へと導いた司教聖アンブロジオによれば、「私たちはみんなマリアにならなければならない。けれども誰ひとりマリアにはなりたくない」。

それはマリアの本質が、御子を宿して世にもたらす為に、「自分の思いに死ぬことと、神のみ旨を実現するため」にあるから。マリア様に倣って自我の殻から脱皮し、自分の思いから脱皮する。真のキリスト者とは、自己中心と自己保身から脱皮して、他者のために生きる人をいう。

子犬のときに首輪をつけられたまま捨てられて大きくなり、その首輪が外せなくて、手のつけられない凶暴な野良犬となった話は、自分の首に首輪をくくりつけたまま（強制された状態）の人間が、どんな状態になるかを考えさせられる。それでも、どんな状態にあっても、失望することはない。神の前で赦しを願う心を持つ全ての人間を、神は救って下さる。

待降節にあたってその心を育てる、即ち信仰を育てよう。



《黙想会》

今年 7 月に 99 歳の母が亡くなり淋しさよりも後悔の苦しみが残った。

2 年間寝たきりで何も出来なくなった 母は、「おかあさん」と呼び続けた。

母という存在は命の原点であり、命の保護者であることが分かった。



「いのち」について

待降節はマリア様への神のお告げと同じように私達へも同じように神のみ旨を受け入れられるかと問いかけてられている。

神が創造のなかで、最も貧しく創られたものは「いのち」。人がよってたかって大切にしなければ、人として生きることが出来ない。だから人間は自分本位。

私は司祭になるまで、色々なトラウマを抱えていて、「自分に死ぬことが出来るか」という命題に苦しみ、人生の負け組の中で叫びをあげながら生きてきた。二人の司祭のカウンセラーを受けて自分の問題に目を向け、神の助けをかりて問題を乗り越えることが出来、気がついたら司祭になっていた。

この世には二つの山がある。一つは富を支えに人間の価値観に基づいた山。この山の頂を目指す者やそこに住む者は、勝ち組とも云われるが、神に近付くことは出来ない。雲の間からかなたにそびえるもう一つの山（神の山）に行くには、神と親しくし、気がついて神に立ち帰る者(回心したもの)だけが、マタイのいう「らくだが通るよりも難しい針の穴を通ることが出来る」のである。フランシスコ・ザビエルは「幸いなるかな、心貧しきもの」を体験した人。

「いのち」は大切にされてはじめて生かされる。
不登校の娘を持ったある母親は、次々と襲う苦境にあって、「娘の命と自分の思い」のどちらが大切かと、相談した昌川神父に問われて、その度に「命」の大切さに思いをつなぎ、問題解決へと導かれた。
どん底の体験のなかで苦しんだことによって自分が救われたことを知り、その苦しみを与えられたことを神に感謝出来る信仰こそ、本物といえる。

自分も在日としてさまざまな苦勞をして育ち、母を差別したりした。
38才でクラレチアン会の司祭になったのは、20年間教会から遠ざかった末に、ある司祭に自分の全てをさらけだして告白出来る恵みを得て受け入れられ、「無条件の愛」を体験したから。なんの条件も付けず、ありのままの自分を受け入れて貰う。私はこの無償の愛を、司祭からも家庭からも貰った。司祭になる前、母も弟も「私が私のままでいい」という意味の言葉をくれた。

「自分の思いに死んで、他者のために生きる」。そして今度はそれをお隣さんにも分ける。自分だけが神の元に行っても神は喜ばれない。「あの人はどうしたの?」と、神は他者を気遣われる。

待降節を迎えて、いつでも「**Fiat** み旨のままに」と言われたマリア様に倣いましょう

私の祈り：「もっとも貧しいこのわたしを憐れんでください」

エステルの祈り：「あなた以外に助け手を持たない、このただ一人きりでいる
わたしを助けてください」

(要約 編集部)

[目次](#)

《長生きしましょう》

AM

9 月 18 日日曜日、ミサのあと敬老会だった。敬は恵と置き換えられ、老若男女誰でも参加というのが住吉教会の**おきて**になっている。

若者が並んだ。手には 1 文字ずつ書かれた紙を持っている。

“で じ ん な こ や し ば”

「この文字を読めるように並べ替えて下さい。」

→「なでしこじゃぱん」→「ピンポン」

答える恵老会の面々はすばやい。会場いっぱいの人たちが茶菓のもてなしを受けながら歌やゲームを楽しんだ。

「まだ時間の余裕がありますか？」

M サンがしゃしゃり出た。楽しさに浮かれたらしい。ゲームをする。

毎年ゲームや南京玉すだれなどをしている M サンだが今年は病気に負けた。4 月から体調変化→体が動かなくなって入院→人工透析をすることになった。

「何が原因でしょう？」

「塩分の取りすぎ、食生活の乱れ、ストレスも原因」になるそうだ。

全部心当たりがある。週 3 日の透析は生きる限り続けなければならない。

この病院には、若い人から 90 歳まで 100 人程が通っているようだ。

1 週間休んだら死に至るといふ。「かみさまのいう通り。なるようになるサ」

開き直っている M サンだが、命は大切にしなければ。

かみさまのお呼びがいつの日になるか誰もわからないけれど。





[目次](#)

《 セニョール・デ・ロス・ミラグロス 》

10 月 16 日、セニョール・デ・ロス・ミラグロスのお祝いのミサと聖行列が行われました。ホールでお国自慢のダンスやお料理等を楽しみました。



[目次](#)

《バザーを終えて》

KK

今年のバザーは 10 月 30 日（日）に開催されました。

9 時半のミサから始まり 11 時からの予定を少し早目にスタートしました。

お天気も何とかもちそうで、日差しも強くなかったので北の広場に椅子を設定し、歓談できるスペースを用意しました。

今年もホールは喫茶室、手作りケーキ・コーヒー・紅茶・ジュースなどを味わっていただきました。入口付近はピエタのホーリーコーナー、そしてお寿司、初めての試みのコロケ、（販売だけでしたがとっても好評でした）などの模擬店が並び喫茶のそばでは教会学校の子供たちが輪投げゲームをして小さな子どもたちをたのしませてくれていました。

奥の会議室には食堂スペースとしてテーブルを設定し、今や住吉教会の名物まで言われている赤波江神父様直伝のタイカレーや恒例のビーフカレー、ふっくら小豆の美味しいおぜんざい、何十年ぶり？かのうどんもゆったりと座って頂くことができました。

園庭では男性軍が美味しい炭火焼きの焼き鳥に盛り上がっていました。

今年は中高生・大学生達が沢山手伝ってくれて 1000 本からの鳥を

あっという間に手早く焼き上げ、若い人達のパワーを感じとっても頼もしく思いました。しっかり次世代へのリレーができそうです。

幼稚園の保育室では手芸・雑貨・リサイクルショップとお店が並び夏より暑い中、毎火曜日に集まり準備して作った作品、また各ご家庭で丹精込めて作って頂いた作品等が並びとってもお求めやすい価格にしたので沢山の人の喜んでいただけました。手芸品・雑貨の品・リサイクル品など沢山提供して頂き本当にありがとうございました。

幼稚園の先生がたもお休みにもかかわらずいろいろとお世話になりました。

卒園生達も先生達に会えてとても嬉しそうにしていました。

今回バザーの実行委員長としてかかわらせて頂き、今年の収益金は「東北の被災地の為に」ということでスタートし、最初は何も見えていなかった事が次第に形になっていくのが見えていき、信徒の皆様のご協力のおかげでバザーも無事終えることができ本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

どうもありがとうございました。

見守っていて下さった神様に感謝！



焼き鳥一本 80 円！
おいしいですよ♪



大盛況のリサイクル

[目次](#)

中高生キャンプ 2011 in 網野 8/7 ~ 8/9



毎日御ミサはあります、
感謝♪

2011 中高生キャンプ in 糸網野 中2 YW

私は去年の長崎巡礼にも参加しました。
でも今年の糸網野キャンプは去年と全く違い、長崎とは違うものが
ありました。
この丹後半島は今、過疎が進んでいます。なので、日曜日のミサは
3教会合同のミサをしての教会で行っているそうです。^{いかに}
(北...大宮、山崎山、糸網野、南...加悦、宮津、岩滝)
2日目は大宮、山崎山、加悦教会を巡りました。
山崎山教会で、福島神父様という神父様に「出会い」ました。
とてもユニークな方で印象に残りました。福島神父様は大宮教会で
御ミサをあげてくださいました。加悦教会ではミスター・小川に「出会い」。
この土地の歴史、過疎が進んでいる人が減っていることなどを話してく
さいました。どの教会へ行っても信者さんが出迎えてくださり、お菓子
が用意されていました。教会の温かさを感じ、とてもうれしかったです。
3日目は糸網野教会でミサがあり、宮津教会と岩滝教会を巡りました。
岩滝教会はこの地域の中で一番小さい教会で1973の聖堂なのが多く、
入り口のステンドグラスがきれいで、宮津教会はとても古く、歴史があり、
長崎の教会を思い出しました。
日本海に面する糸網野は海がすぐきれいでした。石が浜もきれいで、
人もそれほど少なく、充分楽しめました。



おやつも毎日あります！
感謝♪

最後に、無事に糸網野から帰るまで見守ってくださいました神に感謝!!
赤坂神父様、シロ神父様、ソーダ達、糸網野の方々に感謝!!!



峰山教会 福島神父様（中央の方）



福島神父様

二日目、朝に僕達は、
網野教会の近くの峰山教会
という教会に行きました。
そこには一度会ったことのない
という神父様がいらして、
きいてたので楽しませて
くれました。初めて会ったとき
仙人かと思うくらい印象が
良かったです。見た目がとても
話の内容も印象深く、非常に
ためになりました。 T Y



イエーイ!



2年前の広島の巡礼で小学生なのに特別に行かせてもらいましたが今回、初めて中学生として、この中宿生会のキャンプに参加しました。みんなで仲良く遊べた海はとても良い思い出となりました。また、多くの教会をめぐること、様々な教会があることも知り、人と出会うことができました。住む教会とは違い、床が畳であったことに驚きました。これからも人との出会いを大切にしていきたいです。さらに、つりもしました。なかなか魚が来なかっただけに、1匹つれた時のうれしさは忘れられません。中宿の人は3匹、ついていたリ、太君は大きな魚をつっていたので、うーんと思いました。バーベキューでは自分達でとった魚も食べました。肉や野菜などたくさん食べて元気をつけることができました。このような盛りだくさんのキャンプはとても楽しかったです。これからも楽しいキャンプを続けることができますように。

中1 KS



海は楽しいな♪
泳ぎも釣りも



[目次](#)

《 七五三 》

二人の孫が今年 5 歳と 3 歳となり 七五三の祝福をしていただきました。
世のおじいちゃま・おばあちゃま達はみなさん、孫の大きくなるのは早いとおっしゃいます。私もそう思う一人で、うえの孫が 3 歳の祝福を頂いた 2 年前 したの子はまだ生まれて 3 ヶ月、ごミサの間フニャフニャと私の腕の中で寝ておりました。

じじ・ばばがゆっくり老いを感じ始めているのに孫はどんどん成長していくのですね。

KT

『親の祈り』～七五三のお祝い～

すべての父であられる神さま、この子供たちを授けて下さったことを感謝いたします。この子供たちが強く正しく生きるために必要なお恵みを常に与えて下さい。また私たち親としての尊いつとめをふさわしく果たすことができますように、光と力を与えて下さい。
心からお願いいたします。



- | | | |
|---------|-----------|-------|
| 1. FK | マリア・マグダレナ | 女 2 歳 |
| 2. AS | ルチア | 女 2 歳 |
| 3. WS | アンジェラ・メリチ | 女 3 歳 |
| 4. KT | | 男 3 歳 |
| 5. MT | クララ | 女 3 歳 |
| 6. YT | ルカ | 男 3 歳 |
| 7. RH | | 女 3 歳 |
| 8. SM | マリア | 女 4 歳 |
| 9. TAOA | | 男 5 歳 |
| 10. AT | | 男 5 歳 |
| 11. RM | ミカエル | 男 5 歳 |
| 12. RO | マリア・ソフィア | 女 6 歳 |
| 13. YM | パウロ | 男 7 歳 |



『こどもの祈り』 七五三のお祝い
かみさま、わたしたちは、おとうさま、おかあさまの
おかげで七五三のおいおいをすることができました。
ありがとうございます。
これからもげんきなよいこになって、
かみさまをよろこばせることができますように
おまもりください。



《 祈念祭 》

11 月 6 日(日)ご遺族と共に祈念祭のミサが捧げられ、亡くなられた方への祈りのカードが奉納されました。ミサの後、小聖堂の祈念堂の前でそれぞれの思いを込めてお焼香をしました。



《 バイブル・ハウス 北海道巡礼旅行 》

20011 年 10 月 10 日～10 月 13 日

RK

神戸バイブル・ハウスの北海道巡礼旅行に参加しました。各教派の信徒と一緒に楽しく参加するエキュメニカルな巡礼旅行です。今回は松浦 謙神父さまが団長として私たちを導いてくださいました。

関西空港を 09:05 分に飛び立ち函館空港に着いたのが 10:45 分、ひとつ飛びという感じです。お天気も上々、心配された寒さも大丈夫！！函館空港からすぐさまトラピスチヌス修道院へ向かいました。恵まれた自然に包まれたすばらしい修道院でした。修道院の建物とは別に「旅人の聖堂」と名づけられた小さな聖堂がありました。私たち旅人はまずそこでミサに与りました。この旅行の初めてのミサです。松浦神父様はミサに与る前に丁寧に心の準備をしてくださり「巡礼をとおして神から頂いたよいものを受け止め感謝し、与えられた使命を果たしていくことが出来ますように」と話されました。この言葉を胸に深く刻み、旅の初めにみんな同じ思いを持って心を一つにすることが出来たように思いました。

昼食後は五稜郭タワーの上から、まさしく五角形に整えられた五稜郭を見下ろし、函館の町を一望のもとに見渡しました。そして、当別のトラピスト修道院へ。トラピスト修道院の閉じられた正門の左側の坂を 20 分程登りつめたところにルルドがあると聞き、松浦神父様はじめ足の丈夫な方々は急ぎ足で登っていかれました。足に自信のない私はちょっとだけ坂を登りました。そこに今まで見たことのない大きな立派な栗の木を見つけ、その木の下に落ちている無数のイガ栗に感動し、周りの景色にうっとりとして満足感でいっぱいになりました。みなさまがルルドから下ってこられた時、修道院から迎えの方が来られ、私たちを修道院のお聖堂に招き入れてくださいました。清々しい大きなお聖堂の中で修道士の方が、すばらしいお話をしてくださいました。「修道士であっても人を受け入れ許すということには何年もの月日がかかりました」とおっしゃいました。私たちは祈りの代わりに聖歌を捧げました。神父様の美しい声に合わせ皆様と一緒に捧げた祈りの歌声が今も心に響いています。お聖堂を出ようとしたとき修道士の方が修道院で作られたカードを配ってくださいました。そのカードには色々な言葉と絵が書かれていました。私が頂いたカードには「よく歌う人は二倍祈る人、アウグスチノ」という言葉が書かれていました。ぴったり！！嬉しい！！と思いました。ちらっと横を見ると、そのカードは「孤独は聖者の住み家であり、沈黙は聖者の言葉である。読み人知らず」というもので、それは私にぴったりではないカードでした。

二日目は函館の教会巡りです。私たちはカトリック元町教会でミサに与りました。松浦神父様はミサの中で「巡礼旅行をしながら、神様がイエス様をとおして私たちに与えてくださった恵みを思い、まわりの人のためにどんな小さなことでも良いことをしなさい。」というメッセージをくださいました。

カトリック元町教会は、江戸時代末期にフランス人の宣教師が建てた仮聖堂がはじまりで、1876 年（明治 9 年）に創建されました。聖堂内部の祭壇は、ローマ法王ベネディクト 15 世より贈られた日本唯一のものです。フランス人の神父様がデラ神父様をよくご存知でとても懐かしく思いました。元町教会に別れを告げ外に出ると、高台の素晴らしい立地にハリスト正教会、聖公会ヨハ

ネ教会がありました。其々の教会を訪問しました。ヨーロッパの街角でよく見かけるように絵描きさん達が教会を描いた風景画を売っていました。

三日目は小樽に向かいました、定山溪から小樽への道は見事な紅葉の山々を眺めながらの旅でした。ほう〜っと見とれて小樽につきました。

小樽ではカトリック富岡教会でミサに与りました。パリ外国宣教会によって建てられたということを知り住吉教会と兄弟教会のような気がして急に親しく感じました。このミサの中で神父様はお説教をとおして「どんなときにも、傲慢になることなく、仕えるものになりなさい」というメッセージを私たちの心に残してくださいました。いよいよ北海道名物のお菓子を仕入れたいと意気込んだ矢先、ザザぶりの大雨にみまわれました。それはそれはひどい雨でお菓子のお店を回っている間中、傘を突き抜けてくるような雨が降っていました。ところが、羊が丘展望台につくと雨は止みこれまたカナダにきたのかと思うような牧草地に靄がかかり幻想的な風景に出会えました。

四日目いよいよ帰る日です。朝、藤女子大学を訪ねました。旅行に参加されていた方のお姉さまのシスターが出迎えてくださいました。学内にある札幌マリア院聖堂でミサに与りました。朝日がステンドグラスを通して聖堂の中を黄色や赤い色に染め、祈る私たちに神様からの恵みが降り注がれているようにみえました。お説教の中で「イエス様を信じること。信仰によって義とされる。信仰を持って生きていこう。人は行いによるのではなく信仰によって生きていく。信じるということは一歩踏み出すこと」というメッセージをくださいました。そしてご聖体をいただくときには全員で祭壇を囲み輪になって祈りました。ミサの中で黙々と一人で祈るのではなく皆と心をつにして主を賛美し、主に感謝する瞬間を感じました。

最後の教会訪問はカトリック札幌司教座教会である北一条教会でした。聖堂でお祈りをしたあと、北一条教会の神父様のお話を聞き、私たちは賛美歌を捧げて聖堂をあとにしました。どこの教会も暖かく迎えて頂き大きな感謝でした。

そのあと札幌市街散策。時計台も大通公園もたわわに実ったナナカマドの真っ赤な実で見事に彩られていました。関西ではあんなに美しいナナカマドを見ることはできません。私は秋のナナカマドが大好きなので本当に嬉しいでした。

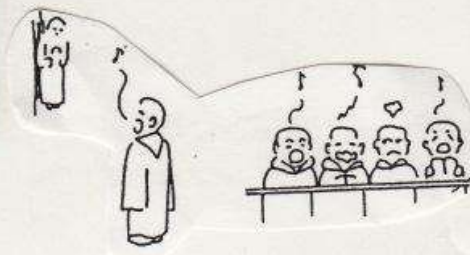
最後に、日本の北の果ての地、北海道にキリストを、そしてキリストの教えを伝えるために来られた宣教師の方々の自分を捨てて宣教に精魂を打ち込まれた強さ、優しさ、偉大さを肌で感じ取ることが出来た旅でした。

今回の旅行を通して全てのミサで私たちを導いてくださった松浦神父様、本当に有難うございました。各教派の信徒が心をつにして、楽しく交った巡礼旅行が出来ましたことに心から感謝いたします。

ハリスト教会正面



トラピスト修道院



修道院へ続く情緒ある道

よく歌う人は
二倍祈る人
アウグスチノ



『信仰』の確信

SL

私はつい最近まで一般的に皆が羨む物を保有し、生活する事が幸せな人生、生き方だと思っていました。

又、そういう生き方が幸せなのだと思っていました。

しかしながらも、心の奥の片隅には常に言葉には出来ない不安感や焦燥感が根付いていました。

“この幸せはいつまで続くのかと・・・”

そしてある日突然、何の前触れもなく私には耐え難いほどの試練が嵐のごとく襲いかかってきました。私にはかけがえのない肉親が立て続けに二人も、一言の別れの言葉も無く逝ってしまったのです。

この深い痛みから立ち直れず疲れ果てていたこの身体には、既に重い病魔が住み着いている事を医師に告げられ私は絶叫せざるをえなかったのです。

“神よ、何故私にこのような試練を与えるのですか？ 私が一体何をしたというのですか？ 言葉も習慣も違う異国の地に嫁いできて、自分なりに一生懸命生きてきたのに一体私が何をしたというのですか？ 私より悪事を働いていると思われる人達でも何の試練も無く生きているのに。何故私にだけこんな仕打ちをなさるのですか？” 神様に見捨てられた様な喪失感に襲われ、疑心暗鬼に陥りました。

死を目の当たりにし、死の恐怖の渦の中でもがき苦しみました。そんな中でいつともなく私は神様がわたしの中に共にいて下さる事をはっきりと知りました。私を生かして下さった神様、私の罪を許して下さった神様、慈愛で私の痛みを癒して下さった神様、全ての苦痛や迷いから心の平和と常に感謝する心をもたらし下さった神様を心の底から感じる事が出来たのです。

数日前、思いがけなく再びある事で緊急入院する事になりました。入院申請書の記入欄の最後は宗教欄になっており、今までは躊躇する事無く『カトリック』と記入しておりましたが、今回はとても戸惑ってしまいました。

“果たして私は「ただ宗教を持っているだけの人？」それとも「真のカトリック信者？」・・・日曜日には、ただ習慣的に課題をこなすようにミサにあずかる信者ではないのか？ どれだけ神様を理解し説明出来るのだろうか？” と自問自答しました。この入院を通じて、私はカトリック信者として恥じることは無いだろうか、御言葉を実行出来ているだろうか、深く考える機会になりました。

神様への信仰の深さはまだまだ足りない私ですが“父なる神よ、私は従います。私の全てを捧げます。私の家族、私の身体、私の霊を。私の弱さ、才能、過去、

現在、未来、私の全て、私自身を捧げます。”

“全能なる父よ！今までの私の傲慢、不信心をお許し下さい。全てに於いて欲望と執着に捕らわれず、父の意に反することなく、苦しんでいる人をいたわる者となれる様にお導き下さい。

父のみご存じの私の命の最後の日迄、父の意に添い、父の道具として使って頂き、常に一緒にいて下さる事を確信しています。”

私たちの主キリストによってアーメン

クリスマスに向けて、L さんに「自己紹介」記事をお願いしていたら、新しく生まれかわりつつあるご自分の信仰の原稿をお寄せくださいました。この春の思いがけない闘病生活を通じて、神様に向かう心が以前と変わっていくご自分を、傍らから第三者として見つめ、思いを語って下さっています。住吉在住のお子さんとお孫さんのお手伝いに鹿児島から来られています。「お掃除が大好きですから。炊き出しも行きます。」とご都合のつく日は全て参加して下さいます。働き者の「お掃除の天使」L さん。どうぞいつまでもお手伝い頂けるようにお体の方もおいとい下さい。

(編集部)



《図書を紹介》

『ふり向けば恵みの軌跡 ―東敦子自伝―』

女子パウロ会 出版

アズマさん…何となくお名前を知ってはいましたが、ふと図書コーナーで手にしたこの自伝で、関西出身で声楽の勉強の為イタリアへの留学中に受洗されたカトリックの方だとは初めて知り、思わず親近感を抱きながら読み進めました。その中で多くの学びを得ました。ご存知の方は多くいらっしゃるかと思いますが少しご紹介します。

1960 年前後、東京芸大時代に自宅近くの教会からのオルガンの響きに魅了され音色に誘われ入っていった際に神父様に声を掛けられ一節歌ってみせる彼女に、その時言われた「あなたは素晴らしい声を神様から頂いています。それを感謝し神様の為に歌って下さい」―この言葉が核となり、信仰心の芽生え、自らのタレントを生かす為の惜しまぬ努力に繋がり、一生の糧となっていきます。

海外へ行く事さえも困難だった時代に、本場イタリアの地でプッチーニ作曲オペラ「蝶々夫人」の役を掴み、好評を得てどんどん世界へ羽ばたき活躍する東敦子を支えたのは、敬愛する師との出会い、又同じ日本人留学生だった彫刻家と築いた家庭でした。そして日本人、芸術家としてのアイデンティティ。そして何よりも留学当初、修道院の寮で過ごす中で導かれたカトリック信仰、聖母への祈りが軸でありました。

この本の執筆にあたり、自らの人生、主にイタリアでの生活、成功する数々の舞台のエピソードを振り返り、懐古する中、彼女は病床にありました。癌に侵され平成 11 年のちょうどクリスマスに、天に召される事となった偉大なプリマ・ドンナとこの本で出会えたことは、クラシック、特に教会音楽を学ぶ一人として大変意義深いものとなりました。又、次の愛読書を読み返すきっかけにもなりました。

『同じ年に生まれて―音楽、文学が僕らをつくった』

小澤征爾・大江健三郎 中公文庫

先の東敦子さんは 1936 年生まれ、小澤、大江両氏は 1935 年生まれ、全く同年代の彼ら、先駆者に心から敬意を抱きます。

この「同じ年に生まれて」は国内外問わず活躍する巨匠の二人、共にハーバード大学の名誉博士号を受けられた数か月後の対談をまとめた一冊です。若い頃からのそれぞれの歩みや、今（出版された 2003 年当時）の考えなどを意見交換する中で、互いの理解を深め高めていきます。

非常に濃く、多岐に亘る内容の中で、特に印象に残るフレーズは「個」「ディレクション」「新しい人」。まず自分という「個」をきちんと持つべき、それで社会に共同体に通用していく。又「ディレクション」、訳すと方向性、表現の意欲というものが、世界で重要なコミュニケーションの中で必須である、と意見が合致します。そして大江氏がノーベル賞受賞後、頻繁に示す「新しい人」＝「新しい個人」「個として責任

を取る人」「個として誇りを持っている人」。

これからの日本を案じる反面、希望を持って若い人を育てる仕事をされる二人の音楽論、教育論、日本人論…これらは次の世代へのメッセージ集となっています。

小澤征爾氏の初めての音楽との出会いもお母様の通う教会でした。讃美歌とオルガンの音色に心惹かれ、芸術の道を志す事になります。

一方、大江健三郎氏の「新しい人」、これは新約聖書パウロの「エフェソの信徒への手紙」との出会いから引用し、自身はキリスト教徒ではないけれども、世の中にイエス様のように「新しい人」として生き続けるべきだと発信しています。

総じて、枠組みを超え、人間の根底、真髄を支える「音楽」「文学」はいかに人としての素質を高め支えるか、という事を証しする凝縮した本書には、いつも新しい発見があり、励まされます。この対談が実現し出版されたのが 10 年前。国難にある今、お二人はどんな心情でいられるのか、叶うなら今一度…と久々に読み返し切に感じます。

また同じくパウロの言葉にも数々触れている次の一冊にも、図書コーナーで出会いました。

『断想 足元を深く掘れ』

奥村一郎 著 女子パウロ会出版

東京大学在学中に禅仏教よりカトリックに改宗し、カルメル会司祭となられた著者の、数々の小冊子に掲載されたエッセイ集です。広い視野での宗教観、祈りの姿勢等を読み易い語り口で説いています。身近な喩えや、文学作品、また禅宗の言葉を用いて、目線を同じくして、みことばとキリストを共有したいとの思い溢れた、温かさや強さを感じる秀作です。

中の一節から、たくさん引用される八木重吉の詩を用いて。

「すぐれた ころは たえず せかいをやきなおしている
それゆえに このせかいをそのままにみて これはよいと ありがたくおもう」

つい青い鳥を捜してしまいがちな私達に、今手にある幸せをみつめよ、生きる場は今ここにしかない。足元を掘るとは、現実への嘆きでなく愛と感謝をもって祈る事。これが世界をやきなおす事になるのだ、と著者が問いかけます。やきなおす、とはい換えれば、新たになることでしょう。

御子のご誕生を心新たに喜び、そして回心したパウロに倣い「新しい人」になろうと目指し、明年を迎えたいと心から思います。読書の恵みとこの記述の機会に感謝しつつ。

マリア・クララ・シャンタル AS

『マザーテレサの秘められた炎』

女子パウロ会

ジョゼフ・ラングフォード著

里見 貞代 訳

何でもお出来になる神様が、こんなに弱く小さな、わたしの愛に渴いている！

マザーテレサが 1946 年 9 月 10 日に、イエスからお恵みをうけた体験について語った「バラナシの手紙」といわれる文章を読んで、私は今更ながら、今まで、神様に対して他人行儀だったみたい？ひとみしりが過ぎた？と気付かされたのです。私は感動してこの部分をコピーし、しばらく持ち歩いていました。（結局、本も購入しました。）

マザーの感じた「イエスの渴き」は、すぐに理解出来そうありませんが、マザーの目を通したとき、聖書の言葉が生きているという事実は、素直に感じ取れました。

マザーの内面の探求に留まることなく、著者は、イエスと私たちの関係は、二つのマグネットのように、私たちが神を「望む」ことによって、わたしたちの望みを神の望みに繋げることができると言い、祈りや黙想の方法についても、詳しく書かれています。

震災や、多くの悲しい辛いことが起きた 2011 年にこの本と出会えたことは、大きなお恵みでした。

HK



飼い葉桶の幼子を見て、
だれが神の子とと思ったであろうか。
神は幼子のうちに隠れておられる。
神は「お忍びで」来られた。

この矛盾は、クリスマスの秘義の本質。

神の威厳は、卑しさのうちに、

神の力は、弱さのうちに、

神の永遠は、死すべきからだのうちに現れる。

神は静かに来られる。

神はその力を言いふらし、見せびらかせることはない。

家畜小屋と飼い葉桶の出来事のうちに、

ゴルゴダの十字架はすでに、ひそかに予告されている。

「クリスマスに贈る 100 の言葉」

カール・レーマン

（女子パウロ会発行）より

[目次](#)

《後 記》

以前読んだ本の中で、マザー・テレサの居室について記されていたことを思い出します。

マザーの 2 階の私室は 1 階の台所から上がってくる熱気をまともに受け、又隣が共同トイレ、勿論エアコンも扇風機もなしという劣悪な場所でしたが、彼女は、ここは他のシスター達には住まわせられないとの理由で自ら選んだ部屋だったという事です。

日本国内は勿論のこと、世界的に不安要素の多い 1 年でしたが、他人への思いやり、許し合う心、マザーが常に諭されていた惜しみない愛をもって、どうぞ世界が平穏になりますように。

M

遅かった紅葉も散り冬になりました。
困難な一年であったからこそ共にいて下さる神様の有難さを感じます。

この出逢ひこそクリスマスプレゼント 稲畑汀子さんの句です

皆様に素晴らしいプレゼントがありますように！

H

ミ サ

主日ミサ	日曜日	9 : 3 0
第 1・第 3 土曜日	(スペイン語)	1 9 : 0 0
週日ミサ	月・水・土曜日	7 : 0 0
	火・金曜日	9 : 3 0
	木曜(聖体礼拝)	1 7 : 3 0
	木曜日	1 8 : 3 0

信 仰 講 座

入門講座	第 2、第 4 日曜日	1 1 : 0 0
聖書の集い	金曜日	1 0 : 3 0 1 4 : 0 0
聖書講座 (マルコ福音書)	第 2・第 4 木曜日	1 4 : 0 0
信仰の分かち合い (信徒)	第 2・第 4 日曜日	1 1 : 0 0
教会学校	第 1・第 3 土曜日	1 4 : 0 0 ~ 1 6 : 0 0
シスターのお話	対象：子供	日曜ミサの後少しの時間
評 議 会	第 3 日曜日	1 1 : 0 0
野宿者支援炊出し	第 1 土曜日	9 : 3 0 住吉教会集合

「すみよし」 第185号

発 行 日	: 2011. 12. 25
発行責任者	: 赤波江豊神父
編 集	: 広報チーム
発 行 所	: 神戸市東灘区住吉宮町 2-18-23 カトリック住吉教会
TEL	: 078-851-2756
FAX	: 078-842-3380
	http://www.sumiyoshi.catholic.ne.jp
製版・印刷	: 信徒有志